

[AW] 学会賞受賞講演

第2日目 (2021年7月8日(木)) 11:20~12:00

第1会場 | 国立京都国際会館 1階 Main Hall

司会：北川 雄光 (慶應義塾大学医学部外科学) 司会：大段 秀樹 (広島大学大学院医系科学研究科消化器・移植外科学)

AW-2

JSGS Science of the Year 2021(学術部門)

山本 浩文:1

(1:大阪大学医学部保健学科分子病理消化器外科)

この度、日本消化器外科学会の学会賞(学術部門)頂きました。学会関係の皆様方には厚く御礼申し上げます。この賞は消化器外科の研究をするものにとって憧れの賞であり受賞の喜びに浸っております。受賞テーマは大腸癌の微小リンパ節転移ですが、約20年に渡りこのテーマに関わることができたことが幸運であり、研究に関わって頂いた多くの大学院生、臨床医の先生方の尽力による賜物と感謝しております。特に、リンパ節中の癌細胞の免疫染色による大腸癌リンパ節 Mapping(Clin Cancer Res 2002)と免疫染色 vs RT-PCR (J Clin Oncol 2002)の二つの微小転移研究を精力的かつ緻密に行い、現在の礎を作ってくれた能浦真吾先生(現・市立豊中病院部長)の功績が大きかったことを記しておきたいと思えます。この二つの論文は後にNCCNのガイドラインや、ASCOのメタアナリシスに取り上げられました。更に微小転移を通常の転移とみなすとした2018年AJCC TNM stagingの革新的改訂において、その根拠となったITC(isolated tumor cell) vs Micrometastasisについてのメタアナリシスの中で私達のリンパ節 Mappingの論文が590の論文から最終8個の中選ばれ、思いがけず改定の中心的な一翼を担えたことも幸運でした。臨床試験では10年の歳月をかけてCEAに対するRT-PCR法による前向き試験を行い、Stage IIの20%以上はすでにStage IIIに匹敵する腫瘍量がリンパ節に存在し、再発しやすいことを明らかとしました(Clin Cancer Res 2016)。検査均てん化の為にCK19を標的としたOSNA法による大腸癌での転移診断の保険収載にも貢献し、実臨床でOSNAの病理補助診断における有用性を示してきました。現在、OSNA陽性のハイリスクStage II大腸癌における補助化学療法の有用性について33施設の先生方と臨床研究を行っております。ASCO, ESMOのハイリスク因子をはじめとして再発予測因子は多数ありますが、その因子を有する大腸癌に抗癌剤が有効かどうかは別の問題です。例えば粘液癌や低分化癌は予後不良ですが抗癌剤での予後改善はなかなか難しい現状があります。一方、リンパ節転移は補助化学療法の適応となるGold standardですので、その延長上にあるリンパ節中のmicrometastasisに対する補助化学療法の感受性については幾分か勝算があるはずで、大きな誇りを胸に共同研究者の皆さんと一緒に進めてゆきたいと考えています。ひとつでも多くの施設のご参加をお待ちします。